

人間発達の「地層理論」について

神谷 栄司
花園大学

On the Theory “Geological Superimposition” concerning Human Development

Eiji KAMIYA,
University Hanazono

Abstract

We have such the notion, that the theory “geological Superimposition” is able to express holistic Vygotsky most similarly. Thus this paper has the aim to clarify two objects: understanding characteristics of this theory and considering its characteristics mainly through kinder’s speech and words.

We found that the theory “geological superimposition” has four characteristics: 1) Human development is understood as the structure of superimposition, in its base layer the contradiction or collision between the natural and the cultural-historical is observed; 2) Here the natural is not equal to the innate. The natural means not only the innate, but the natural or spontaneous forms of psychic activity, the lower forms of culture; 3) The contradiction or collision is understood as the analogue to the contradictory processes of biological evolution. Therefore we can find here the unity of biological evolution and human development; 4) This superimposition has the connection with the structure of brain and with the psychological systems, and also contains psychic development and its collapses.

In order to consider the four characteristics, especially the contradiction or collision among the natural and the cultural-historical, we analyzed such the kinds of speech and words as pre-speech babbling, first words, formation of syntax, kinder’s particular “new words and speech” et al.

はじめに ヴィゴツキー理論という呼称について

筆者がヴィゴツキーそのものの研究を本格的に開始しようと考えたのは、彼の『情動に関する学説』（1933 / 1984 // 2006）と児童学関係の著作（2001）を読み進めたときであった。これらの著作は、ヴィゴツキーの主著と考えられている『思考と言語』との直接的な連関のなかにあるとは思えない。言いかえれば、彼が著したモノグラフのなかで『思考と言語』がもっとも充実したものであるとしても、それを唯一の主著ではなく主著の1つとして、相対化する必要があると感じた。振り返ってみると、「情動」と「児童学」の諸著作は、筆者にはそれほどインパクトが強かったであろう。

そのときに立てた仮説と戦略は次のようなものであった。——おおよそ1929年秋から1934年の死までの30年代のヴィゴツキー理論には、3つの大道—①言語を中心とする媒介的発達理論、②個々人の焦点化をも含む人格発達理論、③心身の統一性を基礎とした情動発達理

論—が並行して走っているものの、それらの統一軸が未形成であった。ヴィゴツキーがおそらく明示していない統一軸を探究することが筆者の課題である。言い換えれば、『思考と言語』（1934 / 1999 // 2001）をヴィゴツキー理論の一部として相対化すること、少なくとも、『情動に関する学説』と児童学関連の諸著作は『思考と言語』に匹敵する充実した著作になる可能性をもっていたであろう、と。

これが、筆者が著した『保育のためのヴィゴツキー理論』（2007）、『未完のヴィゴツキー理論—甦る心理学のスピンオフ』（2010）の基本的モチーフであった。

そのとき、筆者はヴィゴツキーの諸理論を「ヴィゴツキー理論」と表記することに積極的な意味を見出していた。それによって様々なアプローチを相対化しやすい、しかも、お互いに議論しやすい、一種のプラットフォームを表すような表記、という意味である。ただし、それは形式的な呼称であって、それ自身からは何も出てこない。だが、それでも相互の相対化と議論という積極性は

ある、と考えた。

ある理論や事柄の形式的規定はときには内容的規定を凌駕することもある。とくに、その理論や事柄の一部分を捉えた内容的規定である場合には、その規定は考察を呪縛しがちである。かといって、形式的規定が唯一の満足すべき規定である、ということにはならない。問題は、上記の統一軸そのものではないにせよ、ヴィゴツキーが実際に述べたもののうちで、どのような内容的規定がより全体的なヴィゴツキーを表現しうるのか、という点にある。時間はかかったが筆者の現在の考えを述べれば、そのような内容的規定たりうるものは、人間発達の「地層理論」である。

以下、その理由を述べることにしよう。

人間発達の「地層理論」とは

ヴィゴツキーが発達の地層理論をもっとも詳細に考察した論述は、『高次心理機能の発達史』「第13章 高次形式の行動の教育」(1931/1983//2005)のなかに見られる。

ヴィゴツキーはこの発達理論について、概ね、次のように述べている。

「子どもが文化のなかに根づく過程」 процессы вращивания ребенка в культуру (同上, c.291) は、習熟の習得や知識の獲得と見なされやすいが、発達の概念を許される極限にまで拡大して、この過程を発達と捉えるべきである。

こうした文化的行動の発達の歴史は、生物学的事実と対照してみると、規則的に移行し変化する胎児の発達とは縁遠く、むしろ、「動物の新しい種が発生し」「生存闘争の過程で古い種が淘汰され」「生きたオルガニズムの自然への適応が破局的に進行する」 как постепенно возникали новые виды животных, как гибли в процессе борьбы за существование старые виды, как катастрофически шло приспособление к природе живых организмов (同上, c.292) という、生物の進化に似ている。したがって、子どもの文化的発達のなかに「革命的变化、前進運動、空白、ジグザク、紛争」 революционные изменения, движение (同上, c.291) назад, пробелы, зигзаги и конфликты (同上, c.292) を見なければならぬ。

以上のようなマクロに見た発達を、より具体的にミクロな見方から捉えようと、発達は「自然的なものとの、原始的なものとの、原始的なものとの、有機的なものとの、社会的なものとの、矛盾あるいは衝突」 противоречие или столкновение природного и исторического,

примитивного и культурного, органического и социального (同上, c.292) と規定され、さらに、全面的ではないにせよ、文化的人間の現在の行動を地表とするような「地質学的」成層 «геологическое» напластование を構成している——私たちの脳がそのような成層を構成しているように (同上, c.292)。

ヴィゴツキーがこの発達理論の例証としてここであげているものは、「自然的なものとの社会-歴史的なものとの衝突 столкновение природного и общественно-исторического」(同上, c.292) としての子どもの「初語」、「子どもが思考する様式と子どもの発話」とのあいだにある「深い弁証法的矛盾」、「思考の基本的な高次形式」に対する「思考の自然的形式」の闘争と適応、「原始的算数から文化的算数への移行」であるが (同上, c.292-293)、それらにとどまらず、彼は、そのような矛盾・衝突・転化は「本研究の他のすべての領域」において一歩毎に観察することができた、としている (同上, c.293)。

以上のような短い要約からでも、子ども・人間の発達にかかわるいくつかのテーゼを見出すことができる。

①人間発達は成層構造として捉えられる。その基層にあるものは「自然的なものとの文化・歴史的なものとの矛盾あるいは衝突」であり、そうした層の積み上げにおいて、より高次化した次元における「矛盾あるいは衝突」が見られる。

②ここで言われる「自然的なもの」は「生得的なもの」とイコールではない。前者は後者を含みながらも、種々の心理活動の「自然的形式」(おそらく自然発生的形式)、高次機能に対する種々の低次機能さえ意味している。

③人間発達における上記の「矛盾あるいは衝突」が「動物の新しい種が発生し」「生存闘争の過程で古い種が淘汰され」「生きたオルガニズムの自然への適応が破局的に進行する」という生物進化とのアナロジーで捉えられているように、人間発達は生物進化と統一的に理解しようとするのが示唆されている。

④上記の要約からだけではないが、ヴィゴツキーの他の著作と関連づけると、少なくとも、2つの事柄が見えてくる。第1に、各成層にあるのは個別的心理機能ではなく、「心理システム」であろうし、各成層の断面にあるものはこのシステムであろう。第2に、上記の要約にも、脳階層との関連づけが言及されているが、ヴィゴツキーが行ったいくつかの精神疾患(失語症や統合失調症など)の考察において示された高次機能の崩壊と関連づけるなら、地層理論は発達と同時に崩壊をも内包し

うる理論である。

発達の基層にあるもの——自然的なもの文化・歴史的なものとの衝突

人は生まれて暮らす・その土地のことばを身につける。そのように、ことばとは歴史的・社会的形成物なのだから、人は社会的にことばを習得する。だが、この事実が示すものは事柄の一面にすぎない。幼児の言語は、それが事柄のすべてだということへの、反証でもある。そこから知られるのは、言語の歴史的・社会的環境、他者とのことばを介した交わりは、幼児の言語習得のきわめて重要な条件であるが、この条件からのみ幼児のことばの習得（より正確には発達）を解明しようとする試みは、不完全さを免れえない。その試みでは、どうしても説明できないことが顕わになるからだ。むしろ、自然的なもの文化・歴史的なものとの矛盾や衝突の観点が、子どもの言語発達に合理的な説明を与えるように思われる。

たとえば、○歳児の喃語はことばではないが、喃語が表現する・意味をもたない音は世界諸言語のあらゆる音を表すほどに豊かに発達する。ところが、初語を発話する直前に母語にある音も含めて喃語の音のすべてが失われ、母語が示す音が回復されるのには数年を要する【註釈：言語学者のヤーコブソンは音韻論的な鋭さをもって、「幼児言語の音法則と、その一般音韻論における位置」(1939年)、幼児言語、失語症および一般音法則」(1941年)を書いている(ともに服部二郎編・監訳『失語症と言語学』1976年所収)。彼は喃語について次のように述べている：喃語期の発音について、「幼児〔正しくは乳児—神谷〕は喃語期の間にある1言語あるいは1言語全体をとって見ても見出し得ないような多様な調音を集積する」。ある観察者によれば、「喃語期の絶頂にある幼児〔正しくは乳児〕は『考え得るすべての音声を発し得る』」。ところが、「前言語段階〔喃語期と同じ—神谷〕から初めて語を獲得する段階、即ち真の言語段階に移行するにつれて、幼児は様々な音声を発する能力をあらかじめ失ってしまう。周囲で話される言語に欠けている調音が幼児の貯えの中から容易に消えていくことは理解に難くない。しかし喃語にも、周囲の大人の言語にも共通する音声の多くまでもが、手本の支えにもかかわらず消えて行くのは驚くべきことである」(『失語症と言語学』p.24)。また村田孝次が紹介するところによれば(『幼児の言語発達』培風社、1968年、p.26)、失語症研究者であるゴ

ルドシュテインも、「喃語期と談話開始期との間に比較的沈黙の時期があり、また喃語期に生じる音声パターンのほとんどすべては談話期にはひきつがれず、談話期では新たな習得がなされるということが、このような沈黙期が生じる理由だ」(Language and language disturbance, 1948)と述べている。ゴールドシュテインのこの著作の該当箇所(同上、p.35)にはヤーコブソンの論文〔1941年〕の叙述が肯定的に参照されている〔なおゴールドシュテインの上記著作のBibliography, p.354にはヤーコブソン1941年論文の出版年が1914年と誤記されている〕。これは、どのような言語にも通じるものであろう。1歳頃に発せられる初語は当初、発話するその子の主観的印象を軸にした意味の多義性をもつが(意味の般化)、数か月をかけて慣用的な意味を得るにいたる(意味の分化)。
【註釈：村田孝次はこの時期の意味の動態に関する具体的データを示している(『幼児の言語発達』p.173-177)。村田は何人かの1歳児の観察のうちから一人のそれを選んで紹介している。そのうち、動物に関する語を例にあげると、1歳3か月以前のその子は「ウーウー、ワウワウ、ウン」によって6種類の動物を表していたが、1歳5か月で「ワンワン」=イヌ、1歳6か月で「ンマ」=ウマ(その後、「ンマ、オンマ」を経て、1歳9か月で「オンマチャン」=ウマ)、1歳7か月で「メーメー」=ヤギ、1歳8か月で「チャーチ」=ウサギ(その後、「チャーギ」を経て、1歳10か月で「ウチャギ」=ウサギ)、1歳8か月で「ニャンニャン、ヤンコ」=ネコ(その後、「ヤンコ、ニャンコ」を経て、1歳11か月で「ニャンコ」=ネコ)、1歳8か月で「モーモ、ウチ」=ウシ(1歳9か月で「ウチ」=ウシ)が現れてくる(p.174)】。

もちろん、このような意味の変動は日本語だけに固有なものではない。そのように意味の分化した初語は、統語論的には、「1語文」と呼ばれている。ヴィゴツキーの初語(1語文)に対する分析を見てみよう。彼は、この語のなかに、ことばの形相的側面・意味的側面という2側面の、相互依存的(統一的)であるとともに対立的であるという性格の典型的事例を見出している。この2側面の発達は正反対の方向に進む。ことばの外的・形相的側面は、単語→2~3の語の結合→フレーズ→文→より複雑な文というように、部分から全体へと発達する。他方、ことばの内的・意味的側面は、全体から、つまり文(1語文)から始まり、後になって部分的な意味的単位、個々の語義の獲得に移行するというように、全体から部分へと発達する。だが、この2側面の反対方向への

それぞれの運動はけっして自立的・独立的な運動ではない。ヴィゴツキーの言うところでは、「子どもの思惟が〔全体から〕分節化し個々の諸部分からなる構成に移行するのに応じて、ことばにおいて子どもは部分から分節化された全体へ移行する。また逆に、ことばにおいて子どもが部分から文という分節化された全体に移行するのに応じて、子どもは思惟において未分化な全体から諸部分に移行しうる」(1934/1999//2001, c.286)。このように2側面は相互に支えあいながら反対方向に発達するのであり、その意味で両者にあるのは「一致であるよりはむしろ矛盾」である(同上)。ちなみに、上記のような2側面の統一性と対立性そのものは、ヴィゴツキーにおいては、あらゆる形式のことば(内言を含む)のそれぞれの特殊性のなかを貫いており、後に部分的に述べるが、言語の習得や使用の種々の形式において、自然的なものと文化・歴史的なものとの矛盾と衝突がその各々に姿を表していると考えることができる。発達の基層とはそのようなものであろう。

概ね2歳代のシタックス(統語)の発達もきわめて興味深い現象である。シタックスの具体的な姿は言語によって違いがある。日本語はいわゆる「てにをは」という格助詞によって、英語は語順と前置詞によって、ロシア語は語の格変化によって、それぞれの主たるシタックスが整備されている。これらはすべて2歳代にその基本が発達するのである。【註釈：ロシア語における名詞の格変化の発達については、Эльконин, Д.Б.: *Детская психология*, Академия, 2004, c.66-67 [邦訳エリコニン『ソビエト・児童心理学』駒林邦男訳、明治図書、1964年、134～136ページ]を参照。英語・日本語については村田孝次『幼児の言語発達』。3歳代において、どの言語においても、話しことばの体系の一応の獲得がなされるが、それ以降の幼児のことばには、例外を許容しないかのような「厳格文法主義」とでも呼びうる興味深い現象が顕わになる。大人の語使用の慣用から逸れたことば、たとえば、日本語では「ピンクい花」「緑い葉っぱ」のようなことばが聞かれるし、英語では、せっかく *go* の過去形である *went* を話していた子どもが *goed* という「造語」を発するようになった、という事例が報告されている【註釈：英語の事例については広瀬友紀『ちいさい言語学者の冒険』2017年、pp.45-46。残念ながらこの事例の年齢は明記されていない】。さらにロシア語では、それらに類した子どものことばが数多く記録されている【チュコフスキー『2歳から5歳まで』樹下節訳、理論社、

1970年。なお、1996年刊行の同書普及版もある】。この時期の子どもからは、文法規則に忠実であるが故の愉快的な「造語」が聞かれるのである。

以上のような複雑さと順次性をもつ幼児の母語発達を、言語に関連した社会的条件からのみ考察し説明することはできまい。簡単にいえば、子どものことばの発達は「模倣と創造の統一」 *развитие речи ребенка является собою единство подражания и творчества* (2012//1970, c.24) であると言い、「母語習得の途上にある幼い子ども期に、「ползук», «вытонуть», «притонуть», «тормозило» などというような語を創造しなかった人は、自分の言語の完全な主人には決してなれないであろう」(同上, c.19) と言ったチュコフスキーの指摘【註釈：慣用にはない子どもに独特な語、模倣と創造が統一されたような語を指している。たとえば、上記の *ползук* (ポルズーク) は *ползать* [ポールザッチ、這う] と *жуки* [ジューク、虫] をつなげた造語であろう。】を、どのように理解すべきなのか【註釈：エリコニンは2歳代に次々と現れる名詞の格変化〔ロシア語におけるシタックスの柱になるもの〕とその研究を紹介したあと、次のように述べている。—「一部の心理学者や教育学者は、文法形式の集中的な習得を説明するために、子どもには特別な言語『感覚』があることを前提とした *Некоторые психологи и педагоги для объяснения интенсивного усвоения грамматических форм предполагали наличие у ребенка особого «чутья» языка.*。そして、チュコフスキーらの名をあげつつ、「言語の諸現象、ことに言語の音形式への子どもの特別な感受性が存在するとの前提に同意する場合でさえ、この感受性の発生そのものは言語習得の現実的諸条件から出発して説明されねばならない *если даже согласится с предложением о наличии особой чувствительности ребенка к явлениям языка, в частности к его звуковой форме, то ведь ее возникновение само должно быть объяснено исходя из реальных условий усвоения языка.*」〔1960/2004 c.69〕と言うのである。しかし、この主張には少々無理がある。「言語習得の現実的諸条件」に含まれると考えられる大人の発話〔子どもの前でなされる大人同士の会話、子どもに対してなされる大人の発話〕が2歳児に対して文法形式—この場合には名詞の格変化—を特別に印象づけることがなされているのか、あるいは、なされるのか、また、なされたとしてもそれだけで習得されるのか、と問われねばならない。しかも、なしているのは、言語学者でも心理学

者でも教育学者でもない、2歳代に名詞の格変化への感受性が高まることを知らない普通の大人なのである】。

その点で、ヴィゴツキーはきわめて正確に母語の初期発達をとらえている。その一つは、教授・学習の自然発生的タイプを説明する折に、1歳半から3歳までの子どものことばの発達をあげている。「3歳までの子どもの教授・学習の特質は、この年齢期の子どもは自分自身のプログラムに沿って学習していることである、とすることができよう。このことはことばを例にとれば明瞭である。子どもが通過する諸段階の順次性、子どもがとどまる各時期の長さは、母親のプログラムによって規定されるのではなく、基本的には、子ども自身が周囲の環境から取り出すことによって規定されている。もちろん、子どものことばの発達、彼が自分のまわりに豊かなことばを持っているか、あるいは、貧しいことばを持っているか、に応じて、変わってくる。しかし、ことばの教授・学習のプログラムを子どもは自分で規定している」(Обучение и развитие в дошкольном возрасте, 1935 // 2003, c.21)。この部分には次のような編者註が付けられている。重要な点なので、ロシア語で示し、邦訳を付けておこう。—Вряд ли можно согласится с утверждением автора, что ребенок до трех лет «учится по своей собственной программе», что «программу обучения ребенок определяет сам». Ведь сам автор говорит, что речь ребенка изменяется в зависимости от того, окружает ли его бедная или богатая речь. Следовательно, объем речевых понятий, их содержание и характер не ребенок определяет, поэтому нет оснований говорить о «собственной программе ребенка» (прим. ред.). [3歳までの子どもは「自分自身のプログラムに沿って学習する」、「教授・学習のプログラムを子どもは自分で規定している」という著者〔ヴィゴツキー—神谷〕の主張にはとても同意しがたい。実際、著者自身が述べているように、子どものことばは、彼を取り巻いているのが貧しいことばか、それとも、豊かなことばか、に応じて、変わってくる。したがって、ことばによる概念の量、その内容・性格は子どもが規定しているのではない。それ故に、「子ども自身のプログラム」について語る根拠はないのである(編者註)。たしかに、「ことばによる概念の量、その内容・性格」について言えば、周囲の言語環境に負うところが大きいし、それが規定的であろう。ところが、ことばの教授・学習の問題をシンタククスなどの文法の習得、形容詞と名詞、動詞と名詞の慣用ならざる独特な

結合による新しい語の創造に焦点づけるなら、とても編者註の観点からは問題を解明することはできない。むしろ、「子ども自身が周囲の環境から取り出す」という観点、言い換えれば、子どもの「自分自身のプログラム」という観点によってこそ、文法が関与する問題をクリアに設定できるのである。編者註の観点はヴィゴツキーの理解を狭めている。これも、自然的なものとの文化・歴史なものとの矛盾や衝突の観点の有効性を示す典型的事例であろう。

類人猿研究とヴィゴツキー

地層理論は、類人猿研究を積極的に位置づけることができる。ヴィゴツキーは当時の心理学の新しい特徴づけの1つを『『ポスト・ケーラー』の時代』(1934 / 1982 // 2008, c. 250)と呼んだ。もちろん、ケーラーが終わったというのではなく、ケーラーが切り拓いた新時代という意味である。地層理論の観点からすると、類人猿研究は人間発達における「自然的なもの」を正確かつ豊かに理解することに資する可能性を持っているであろう。

ヴィゴツキーは、当時において最新の類人猿研究であったケーラーとヤーキーズ(1876～1956)による知能とことばの研究を考察した。ケーラーからは主としてチンパンジーの知能の研究が摂取された。

ケーラーは、実験の設計を念頭におきながら、知能(知性)とはどういうものか、について語っている。チンパンジーが、遮るものなしに、バナナ(目標物)にまっすぐに進んでそれを得るとき、そこに知能が働いていたとは言いがたい(人間の場合もそうであろう)。遮るものがあるにもかかわらず、目標物を手に入れられたとき、そこに知能が働いている。

たとえば、自分と目標物の間に金網があり、まっすぐ取りに行くことができない。ところが、よく見渡すと、横の方に自分が出入りできるスペースが空いている。そこを通過して目標物を手に入れられた。そのとき、知能が働いたのである。これは文字通りの「まわり道」であるが、ケーラーは比喩的な意味での「まわり道」を設計した。何らかの形で直接にはバナナは手に入らないようにする(たとえば、高いところに吊るされたカゴにバナナを入れておく)。そこに棒や箱を置いておき、それらをバナナを手に入れる道具として使えるか、また、道具を製作することができるのか、を見ようとしたのである(1917 // 1962)。

もっとも高度と思われる事例は、いったんバナナを棒で自分から遠ざけてバナナを得る、ということであろう。普段なら棒でバナナをたぐり寄せて得ることができるのに、下の方に細かい金網がはってある。ところが、ちょうどバナナを手で取れるくらいの穴が横の方の金網に空けられている。すると、一旦、棒で穴の方にバナナを寄せる（自分から遠ざける）、そのあと、その穴からバナナを手に入れることさえした（同上）。

ケーラーのチンパンジーが、目標物を手にすることができたのは（つまり知能を働かせたのは）、ある条件下においてであった。ケーラーがチンパンジーの知能の働きを論じるときに、Einsicht (insight、洞察) ということばが使われている。ドイツ語のもともとの意味は「中を見ること」なので英訳の insight は間違っていないし、洞察としてもよいだろう（『類人猿の知恵試験』の邦訳では「見抜く」「見抜いて」と訳されている）。ケーラーの事例を用いると、①あるチンパンジーは高いところに吊るしてあるバナナを取るためにバナナの真下に箱を置きジャンプをして取る、ということがあった。箱がかたづけられたあと、②それを見た別のチンパンジーが箱をもちだして（バナナの真下からちょっと離れたところに）箱を置きジャンプしたがバナナを取るができなかった、ということがあった。この場合、①は洞察が働いているが、②は洞察が働いていない、ということである。つまり、バナナと箱の位置関係の「洞察」ということであろう。洞察というと、人間の場合の洞察を思い浮かべて、事物の核心の認識というように捉えてしまうが、チンパンジーの場合には、それが極めて限定的であり、基本的には視覚（あるいは視覚的場）に規定された「洞察」なのである。この視覚的場はレヴィンが2歳児の行動を説明するときに用いた「状況拘束性」に似ている。チンパンジーは、いま、ここ、という場に生きていることになる。

ヤーキーズの場合は ideation（観念化）という用語を用いている。これは正しいとは言えない。ケーラーは、いま眼にしていないバナナを将来手に入れるために道具を整えるならば、そこに「観念」（バナナあるいはバナナを取るというイメージ）があると考えられるが、そのような事例は見たことがない、と述べている。このような意味で「観念」を用いるなら、ヤーキーズの「観念化」は不正確であろう。もっとも、ヤーキーズ自身、「観念」が見られるとしたオランウータンの事例について、その知能は「普通の3歳児のレベル以上ではなかった」（The

Mental Life of Monkeys and Apes: A Study of Ideational Behavior, 1916, p.132）と述べている。

類人猿のことばについてであるが、1910～20年代のケーラーの研究からヴィゴツキーは、チンパンジーにあるのは「情動的言語」（表情・身ぶりなど）であると考え、また、彼は、アメリカのヤーキーズの研究（チンパンジーにおいて30ほどの単語を表す音声が入線譜によって記録されている）では、視覚や身ぶりが利用されていないので、チンパンジーのことばについては最終的結論は得がたい、と考えていた〔とくにチンパンジーにおける「観念化」〕。ヤーキーズらの言語研究では、303の記録が収録されている。その分類は、食物に結びついた音声、他の動物と結びついた音声（ヒトとの行動、仲間との行動）である。それらから、32の語 words が抽出されている。その語のリストを見る限り、食物を表す語 food-word、あいさつはあるものの、大多数は自分の内的状態（痛み、怒り、喜び）を表す語であった（Robert Yerkes & Blanche Learned: Chimpanzee intelligence and its vocal expressions, 1925）。

チンパンジーは声を多様に操っていることはわかるが、大多数は情動的「言語」である、とヴィゴツキーが述べた根拠の一つはこれであろう。

以上のようなケーラーやヤーキーズの研究を踏まえながら、ヴィゴツキーは類人猿の思考と言語について次のような6つのテーゼにまとめている。

- 1 思考とことばは異なる発生的根源をもっている。
- 2 思考とことばは異なる路線に沿って相互に独立して進む。
- 3 思考とことばとの関係は、系統発生的発達的全期間において、いかなる不変量でもない。
- 4 類人猿は、ある面では人間に似た知能を顕わにし（道具の使用の萌芽）、他面では人間に似たことばを完全に顕わにする（ことばの音声、情動のことば、および、社会的機能・社会的言語の萌芽）。
- 5 類人猿は、人間には特徴的な思考とことばとの関係、それらの密接な連関を顕わにしない。チンパンジーの場合、思考とことばは、いささかも直接的に結びついていない。
- 6 系統発生において、知能の発達における前言語的段階〔ことばと結びつく前の段階〕とことばの発達における前知能的段階〔知能と結びつく前の段階〕を、疑いもなく確認することができる。（1934/1999/2001、c.93）

現代の研究では、チンパンジーには語の記号機能がある程度存在するので、「情動のことば」としてだけ捉えることは訂正する必要があるが、上記テーゼのもっとも重要な点である「類人猿は、人間には特徴的な思考とことばとの関係、それらの密接な連関を顕わにしない」ことは、古びていないのである。

さて、現代の類人猿研究は、観察や実験を通して、多方面に展開され、人間の乳幼児の主たる諸行動と対照しうるほどに発展している。そのなかで、チンパンジーの言語についてのみ、その研究の特徴を述べておこう。

人間の幼児の初語は単語であるにもかかわらず文を表す、という事実は、生物進化の観点からすれば、測りしれず大きな意義をもつ。類人猿は事物の「半記号」を理解したとしても、そこから文を構成したという事例は発見されていないようである【註釈：松沢哲郎は、実際の色、色を表す図形文字[松沢による考案]、漢字を対応させて、チンパンジーに「ことば」を教えようとした。実際の色を示して（たとえば散歩中に見つけたタンポポ、色のついたツミキ）図形文字や漢字を選ばせることは可能である。しかし、その逆になると（図形文字や漢字を示して並べられたツミキからその図形文字・漢字が表す実際の色を選ぶ）となるとチンパンジーは「非常にとまどう」。松沢は、チンパンジーの「ことば」の学習は、チンパンジーは記号を見て実際の色を選ぶ、また逆に、「とまどい」ながら実際の色を見て記号を選ぶ、ということではできても、この二つのモメントは「独立」的である、という仮説を得ている。このような意味で、チンパンジーが手にすることのできる記号は「半記号」[これは神谷による造語]であろう [2011, pp.163-165]。なお、友永雅己は、1980年代のアメリカで大型類人猿に言語を教える研究が終焉を迎えた理由を、統語論（シンタックス）のレベルで言語が獲得されない、とした。つまり大型類人猿が文を獲得したという事実は見つかっていない、ということである。もっとも、友永らは言語の面での新たな研究戦略を構築しようとしている [松沢哲郎編『人間とは何か』岩波 2010年、pp.223-224]。他方、シジュウカラは文法を操り文を理解することを野外実験を通して世界で初めて発見した鈴木俊貴らの研究は、類人猿とシンタックスの問題、さらには、シンタックス習得における種の規定性という問題に示唆を与えている（シジュウカラの文法習得にかんする発見については、http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research/research_results/2017/170728_1.htmlを参照)】。してみれば、人間の子どもは、初語において、類人猿の限界と考えられているものを、すでに軽々と乗り越えていることになる。これは、人間における「自然的なもの」および「自然的なものと文化・歴史的なものとの矛盾や衝突」をより具体的に考察していく手がかりの1つになるであろう。

精神疾患の説明

ヴィゴツキーが精神疾患に関連する心理学的問題を発達の問題として捉えた点でよく知られているのは、統合失調症の心理学的本性を概念の崩壊としたことであろう。しかも、それは、移行期(13歳の危機から少年少女期)における概念の形成の対立的観念となっている。ヴィゴツキーは次のように述べている——「統合失調症と移行期は逆方向のなかにある」。「統合失調症において見出されるものは、移行期に構築された諸機能の崩壊である」。「統合失調症患者には、最初に概念形成の機能が崩壊し、その後に変わった言行が始まっている」(1930 / 1982 // 2008, c.124)。地層理論の観点からすれば、発達も崩壊も同一の路線のなかにある。

ところで、きわめて興味深いことであるが、ヤーコブソンも、言語学・音韻論の見地から、地層理論に類似した・言語の発達と崩壊の・成層構造について述べている。

言語学者のヤーコブソンは、彼の執筆した論文の時期(1939年～1941年)からすれば、ヴィゴツキーの地層理論に次いで、言語発達(正確には言語音の発達と崩壊)の成層構造を提起している。その論文とは「幼児言語の音法則と、その一般音韻論における位置」(1939年)、「幼児言語、失語症および一般音法則」(1941年)の2つである(ともに服部四郎編・監訳『失語症と言語学』1976年所収)。彼はこれらのなかで、幼児言語の発達、世界諸言語、失語症における言語の崩壊の3つを関連づけようとしている。ヤーコブソンの言語学における専攻を取って言えば、音韻論であり、彼が行ったのは、この観点からの分析である。音という極めて限られた素材が分析の対象であるので、部分的だと言えばそうなのであるが、彼の考察の場合、限定がかえって実証性を高めている。ヤーコブソンは、音素は、それ自体では意味をもたないが、ことばの意味を表す言語音(価値音)の弁別的機能をもつ(同上、p.37)、として、音声・音韻を位置づけているので、彼の結論はけっして音に関するものだけではない、ということになろう。

ヤーコブソンの考察の結論をきわめて簡潔に要約すれば、次のようになる。——幼児の発声・音韻の発達是世界諸言語に共通する母音・子音がまず形成され、その上に子どもの母語に固有な音声・音韻が形成される（例えばフランス語・ポーランド語における鼻母音、その他の言語を含めて流音 r と l など）。それに対して、失語症における言語崩壊は、その逆に、母語に固有な音韻から始まり、下の層に至る。もっとも重篤な事例では、「一音素、一語、一文」となる。また、失語症患者の言語の回復過程は、幼児の言語発達を高速フィルム（同上、p.63）で見ているかのようなのである。こうして、幼児言語と失語症言語の双方がともに、音声発達の同じ成層（層状）構造（同上、pp.6-7、p.87）を示している。したがって、幼児言語は下層から上層に進み、言語の崩壊は上層から下層へと進む。幼児言語と失語症患者の言語とは、“鏡の像のような関係”（同上、p.61）である。ヴィゴツキー流に言えば、これこそ発達の地層理論を表している。

ヴィゴツキーとヤーコブソンは、用語こそ違え、発達と崩壊に関してはほぼ同じ視点を持っているが、それは偶然なことではない。視点の淵源にある神経学的理論の出発点が同じなのである。ヤーコブソンは、イギリスの最初の失語症研究者ジョン・ヒューリング・ジャクソンの研究（おそらく *On affections of speech from disease of the brain, 1879*）を重要視し、「新しい要素はより以前のものの上に重ねられ、崩壊はより上層部から始まる。これは Jackson が、より複雑なものから単純で原初的なものへの退行現象に関する彼の法則として報告しているとおりである」（前出『失語症と言語学』pp.65-66）と述べている。ヴィゴツキーの場合には、情動の考察についてはジャクソン、失語症を含む病理現象についてはクレッチマーの神経学的研究から学んでいる。ジャクソンによれば、神経系の組織は高次中枢と低次中枢の複雑なヒエラルヒーであり、そこでは、高次中枢のより分化し繊細な形態の活動を何度も乱すことのできるような脳の古い部分の原始的・古代的諸機能は、高次中枢の側からの抑制的影響を受けているが、それ故に、ノーマルな条件のもとでは能動性を自由に発揮して行動において支配的な役割を演じることはできないのである。あれこれの条件のために低次中枢に対する皮質的コントロールが弱まるか、まったく消失するときに、以前には従属クラスであった低次中枢は自立的になり、自由に作用するようになるが、そのために低次中枢の非随意的で極度に集中的な能動性が現れることになる（1933/1984 // 2006、c.147）。

ヴィゴツキーが彼ら〔ジャクソンとクレッチマー〕の研究から摂取したものをまとめれば、1) 機能の上層への移動、2) 高次機能の統御のもとでの低次機能の作用、3) 高次機能の脱抑制あるいは崩壊による低次機能の自立的能動化、の三点である。これらが発達の地層理論を支える神経学的観点であろう。

最後に、重篤な失語である全失語の事例をあげつつ、それが類似する幼児の初語（1語文）と対照しておこう。全失語の事例は次のものである（波多野和夫他『言語聴覚士のための失語症学』2002年、pp.98-99）。

《症例 M。右利き男性。64歳時に脳梗塞が発症し、右完全麻痺と再帰性発話を伴う全失語が発症した。発症3年7か月から約3年間観察された。聴覚的理解には中程度の障害がある。復唱も呼称も音読も、発話する限りはすべて「マタマタ……」を発する。再帰性発話〔ジャクソンによる命名。「偶発性発話」と対照。—神谷〕の最小単位は「マタ」で、これをほとんどつねに3回以上連続的に繰り返し発話する。場合によっては、「マタマタマタマタマタ」と6回以上連続することもある。廊下で ST〔言語聴覚士—神谷〕を見つけると、遠くから左手を振り「マタマタ……」と明るく挨拶をする。病棟では「マタマタ」さんと呼ばれ、本名を知っている人はほとんどいない。病院生活に十分に適応している。

この患者は「マタマタ」にさまざまなプロソディ〔この場合はおそらくアクセント・イントネーション—神谷〕を付加して豊かな感情を表現する。これに指さしや身振り、感情変化をあわせて、「yes/no」、受容・拒否、好き嫌いを中心とした自己の意思をかなりの程度表現しているように見える。しかしたとえ「マタマタマタマタ」と4回の繰り返しを刺激語として与えて復唱させようとしても、適当に「マタマタ」と繰り返すのみである。また、「マタマタ」2回を「yes」、「マタ」1回を「no」というように取り決めて、これをコミュニケーションに役立てる試みをいくら行っても、ただ適当に「マタマタ」を繰り返すのみで成功しない。つまり、「マタマタ」発話を有意味な情報として命題的に使用することが不可能である。

この患者の発話は経過としてはほとんど変化しなかった。この再帰性発話は完全に常同的ではない。プロソディ変化は豊富で、「マタマタ」という音韻上の変形が多少見られたが、「語彙」レベルの変化はなかった。》

この事例を読むと幼児の初語および1語文を思い出させる。この患者の場合、「マタマタ」の音のまわりに「さまざまなプロソディを付加して豊かな感情を表現する。これに指さしや身振り、感情変化をあわせて、“yes/no”、受容・拒否、好き嫌いを中心とした自己の意思をかなりの程度表現しているように見える」。つまり「自己の意思」を表現する自然的形式は失われていない。このことは、幼児の初語を理解する鍵を与えてくれると考えられる。幼児の初語を捉えるとき、音とともに、そのような自然的形式を見逃すなら、初語を真に理解したことにはならないのである。それと同時に、幼児の初語は、この患者の発する音を理解することに導く。「マタマタ」は初語における「意味の般化」に似たものがあると思われるが、「意味の分化」に欠けている。このことは、再び、初語の理解を深めるモメントになる。幼児が、社会的・言語的環境のなかで、「意味の分化」を実現するには、いま使用している「意味の般化」を狭めうる他の音と意味を環境のなかから選び出し、それを「創造」する力を必要とする。それを「自然的なもの」に数え上げることは、理にかなっているであろう。

このような比較から理論的に深めるべきことが浮かび上がってくる。肝心なことは、ヴィゴツキーがいう意味での「自然的なもの」は、上層が成立するとともに、眠り込んでいるのか（上層に何らかの不具合が生じると目覚める）、それとも、上層にあることばの統制下で従属的に働いているのか、という点にある。いま考察している1語文は後者であろう。大人の通常の会話における応答には、しばしば1語文が見られる。また酔っ払った人のことばもしばしば1語文である。このことは、ヴィゴツキーが『思考と言語』第7章で紹介している通りであり、ここから、1語文は幼児期をすぎれば眠り込むというわけではなく、大人になっても働き続けている、と考えることができる。

言語の問題

小論の最後の問題は、自然的なものと文化・歴史的なものとの矛盾や衝突は、幼児期だけの問題であるとか、失語症などの精神疾患の問題であるとか、と限定的に捉えてよいものかどうか、という問題である。幼児期と精神疾患はこの矛盾・衝突を見えやすくしているのであって、けっしてこの2つの問題に限定されるのではない。その逆に、発達の地層理論の観点からすれば、上層への

発達と下層への退行は同じ道において起こっていることや、障害のある人もない人も、ノーマルな発達を遂げつつある子どもも大人も同じ道を歩んでいることを教えている。おそらく、人間発達の全体に接近しうるものが、発達の、あるいは、心理システムの発達の地層理論である。そのマイクロな相において生じている上記の矛盾・衝突は、どんなに見えにくくても、あらゆる成層、あらゆる領域に貫かれている、というのが筆者の仮説である。

とはいえ、見えにくいものを見なければならぬ。そのときに言語の問題を通じた考察で理論的に有益であるのは、ヴィゴツキーが『思考と言語』第7章の最後辺りに書いた、彼の研究のまとめのなかにある「途切れ」の事柄である。それは、研究の順序としては、外側から内側へという分析が行われているが、現実の思惟とことばのドラマにおいては、その逆に、内言から外言への移行を内に含んだ・思惟から語への運動として現れ、そこには種々の「途切れ」が生じている、という文脈において、述べられてことである。少々長いが、ヴィゴツキー自身のことばを引用しておこう。

「ここで、私たちの分析は終了する。分析の結果としてもたらされたものを、一瞥してみよう。言語的思考は複雑な変動的全体だと、私たちには思われた。そこでは思惟と語との関係が、一連の内的平面を通過する運動として、ある平面から他の平面への移行として、顕わにされた。私たちは、もっとも外的な平面からもっとも内的な平面へと、分析を進めた。言語的思考の生きたドラマでは、運動は逆の道を進む—思惟を生み出す動機から、思惟そのものの形成へ、つまり、内的な語、後には、外的な語義、最後には、語〔そのもの〕における思惟の媒介化へと進むのである。しかしながら、これこそが思惟から語への唯一の道であって、これがたえず実際に遂行されている、と考えるのは、正しくないであろう。その逆に、この問題での私たちの知識の現状では、きわめて多様で・数え切れないほどの、ある平面から他の平面への・まっすぐな運動と逆の運動・まっすぐな移行と逆の移行、が可能である。しかし、今やすでに、私たちはもっとも一般的な形で知っているのだが、あれこれの方向へ—動機から思惟を経て内言へ、内言から思惟へ、内言から外言へ、等々—と進むこの複雑な道における任意の点で途切れる運動も可能である」(1934 / 1999 // 2001, c.333-334)。

「私たちは、もっとも外的な平面からもっとも内的な平面へと、分析を進めた」と書かれているように、ヴィゴツキーそのものを考察する観点で、外言から内言へという分析に沿って、現実的關係（たとえば2人の間での口論）が1人の内部で展開されること（たとえば熟慮）、現実的諸關係の人間の内部への転生（превращение、ingrowing）に求めることが多い。それはそれで間違っているのではないが、「言語的思考の生きたドラマでは、運動は逆の道を進む」という彼の指摘にしたがって、内言から外言へという逆運動を視野に入れたとき、ことばの問題への観点はいつそう豊かになると思われる。

とくに、「動機から思惟を経て内言へ、内言から思惟へ、内言から外言へ、等々」と進むこの複雑な道における任意の点で途切れる運動は、ことばの問題を事実的側面から究明する可能性を示唆している。この点でヴィゴツキーが取り上げた例証は、19世紀のロシア記録文学の旗手グレーブ・ウスペンスキーが伝えている農民との対話であるが、「思惟が語に届かない」この事例から、思惟はことばと直接的に一致するものではないこと、が導き出されている。

ヴィゴツキーのいう、任意の点での途切れは、ノーマルな発達をしている大人の場合にも、かすかに見られる。外国語の「誤用」がその事例の1つとなるであろう。ロシアのある若者は in English（「英語で」）と表すべきところを、何度も on English と表現した。英語の辞書で確かめてみたが、そのような英語の用法はないようである。これは母語の干渉のせいであるとの考えにたどり着いた。ロシア語では「英語で（書く、話す）」は на английском または на английском языке（ナ・アングリースカム、ナ・アングリースカム・イズィケー）と表現するが、そこで使われる на（ナ）の一般的な語義は「上に」であるから、この若者の on English の「用法」はよく理解できた。筆者自身の「誤用」をあげるなら、あるときモスクワで年齢を尋ねられて（当時49歳であった）、сорок девять（ソーラク・ジェーヴァチ、49）と言うべきところを、筆者は чetyредцать（チトゥイレッツァチ）と言って一瞬戸惑った。案の定、質問者も「わからない」という顔をしていた。相手は一息ついて「сорок（ソーラク）のことですね」と言われた。筆者はこのロシア語は知っていたのだがとっさに出てこなかった。日本語の40（よんじゅう）も英語の forty も、おおよそ10進法に沿った読み方なので、筆者はロシア語の4（четыре、チトゥイレ）と20（двадцать、ドゥヴァツァチ）、30

（тридцать、トゥリツァチ）と使われる двадцать（ツァチ）を合成した「新語」を話していたことになる。これもとっさの「造語」であった。この場合、10進法の観念によって強化された・既知の2つの言語の干渉であった。諸言語に低次や高次の区別はない。いわば隣りにある。思惟が違う語にたどり着いたようなものであろう。これらの2事例は、チュコフスキーが収集した幼児の独特な「造語」に類似している。

いま1つの事例をあげれば、高齢化にともない普通名詞が出にくくなり、「あれ」「これ」という、より一般性を帯びた語が使われることは、ごく普通の現象である。「あれ、取ってくれる？」という具合に。

このように、普通の発達を遂げている大人の場合にも「途切れ」は認められる。それは、ヴィゴツキーを援用すれば、ことばそのものに内包されている諸矛盾によるのである。ここでは詳しい論述は省くが、思惟から語への運動、内言から外言への移行は、本質的には平坦な道ではなく、対立性に満ちている。その対立性とは、内言において著しい拡大化の傾向をもつ「意味」と安定的な「語義」との「対立性」、内言において語の欠片にさえなる「形相」と肥大化する「意味」との「対立性」、自己に向けられたことばである「内言」と他者にむけられたことばである「外言」との「対立性」などの、内言の発生にともなう諸対立のことである。私たちは日常の会話においてそうした諸対立がないかのように発話しているが、それでもときどき「途切れ」がある。失語症などの精神疾患がある人の場合には、なおさらであろう。

こうして、1つの図式が得られる。詩人や俳人や歌人が自己の感覚・思惟を適切に表現することのできることを苦しみながら探しあて、ときには新しい語を創造させるように（俳句の季語には、かつて創造された「造語」がある。たとえば「虫時雨」）、おそらく、精神疾病や障害のある人たちもまた、ことばを探すのに苦しんでいる。私たちもまた、話しことばにおいて「途切れ」に出会うことは少ないとはいえ、詳しくは述べなかったが、意識的にことばを用いる書きことばとなれば、途端に「途切れ」が多くなる。それぞれに固有の特殊性はあるものの、言語の観点から見ると、疾病や障害のある人も、ない人も、詩人・俳人・歌人も、ことばが内包する諸対立を通り抜けねばならないという点で、本質的には同じなのである。

そうした観点を下支えするものが、人間発達の地層理論である。

【文献】

Чуковский, К. (2012 // 1970) От двух до пяти, Собрание сочинений: В 15 т. Т. 2, М. // チュコフスキー、2歳から5歳まで、樹下節訳、理論社

Эльконин, Д.Б. (1960 / 2004) Детская психология, Академия, М. // エリコニン、ソビエト・児童心理学、駒林邦男訳、明治図書

波多野和夫 (2002) 言語聴覚士のための失語症学、医歯薬出版

広瀬友紀 (2017) ちいさい言語学者の冒険、岩波科学ライブラリー

ヤーコブソン (1976) 失語症と言語学、服部四郎編・監訳、岩波書店

神谷栄司 (2007) 保育のためのヴィゴツキー理論—新しいアプローチの試み、三学出版

神谷栄司 (2010) 未完のヴィゴツキー理論—甦る心理学のスピノザ、三学出版

ケーラー (1917 // 1962) 類人猿の知恵試験 // 類人猿の知恵試験、宮孝一訳、岩波書店

松沢哲郎編 (2010) 人間とは何か、岩波書店

松沢哲郎 (2011) 想像するちから、岩波書店

村田孝次 (1968) 幼児の言語発達、培風社

Выготский, Л. С. (1930 / 1982 // 2008) О психологических системах / Выготский, Л.С., Собрание сочинений, т. 1, М., Педагогика // ヴィゴツキー心理学論集、柴田義松・宮坂瑋子訳、学文社〔ヴィゴツキー、心理システムについて〕

Выготский, Л. С. (1931 / 1983 // 2005), История развития высших психических функций, / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 3, М., Педагогика // 文化的-歴史的精神発達の理論、柴田義松監訳、学文社、2005年〔ヴィゴツキー、高次心理機能の発達史〕

Выготский, Л.С. (1931 / 1984 // 2004), Педология подростка. Глава IX-XVI, Государственное учебно-педагогическое издательство, М.-Л./ Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 4, М., Педагогика // 思春期の心理学、柴田義松・森岡修一・中村和夫訳、新読書社〔ヴィゴツキー、少年少女の児童学、9～16章〕

Выготский, Л. С. (1933 / 1984 // 2006), Учение об эмоциях. Историко психологическое исследование / Выготский, Л. С., Собрание сочинений, т. 6, М., Педагогика // 情動の理論—心身をめぐるデカルト、スピ

ノザとの対話、神谷栄司・土井捷三・伊藤美和子・竹内伸宜・西本有逸訳、三学出版〔ヴィゴツキー、情動に関する学説〕

Выготский, Л. С. (1934 / 1982 // 2008), Проблема развития в структурной психологии / Выготский Л. С., Собрание сочинений, т. 1, М., Педагогика // ヴィゴツキー心理学論集、柴田義松・宮坂瑋子訳、学文社〔ヴィゴツキー、構造心理学における発達の問題〕

Выготский, Л. С. (1934 / 1999 // 2001), Мышление и речь, Лабиринт, М. // 思考と言語、柴田義松訳、新読書社〔ヴィゴツキー、思考と言語〕

Выготский, Л. С. (1935 // 2003) Умственное развитие детей в процессе обучения, М.-Л., Государственное учебно-педагогическое издательство // 「発達の最近接領域」の理論、土井捷三・神谷栄司訳、三学出版

Выготский, Л. С. (2001), Лекции по педологии, Ижевск, Издательский дом Удмуртский университет〔ヴィゴツキー、児童学に関する講義〕

Yerkes, R. (1916) The Mental Life of Monkeys and Apes: A Study of Ideational Behavior

Yerkes, R. & Learned, B. (1925) Chimpanzee intelligence and its vocal expressions

